



## 昼下がりの喜劇

栗原浩英

これまでベトナムに行く度に気が重くなることがあった。それは現地で購入した文献を搬出する際の煩雑な手続きである。まず文献の著者、名称、出版社、出版年、冊数などを明記したリスト（同一のものが3部必要）と現物、さらに受入機関の長がサインした身分証明書を携えて、文化省に行かなければならない。文化品輸出管理室でリストと現物の照合が行なわれ、担当官が問題ないと判断すれば、初めて梱包を許される。小包に「文化品封印」を貼った後、規定の「検査料」を納入しなければならない。そして担当官発行の証明書をもってやっと国際郵便局に行けるというわけだ。

どう考えてみてもこの制度は生産的とは思われなかったし、なぜ煩わされた挙句に金まで払わなければならないのか。「ドイモイ」の精神にそって一刻も早く廃止してほしいというのが私の切なる願いであった。助手投入期間中、私には3回ほどこの手続きをする機会があったが、毎回時間は昼下がり、担当官はAさん（室長、男性）、Bさん（男性）、Cさん（女性）と同じ顔触れなのに、雰囲気がいいつも異なっていたのが印象に残った。

その雰囲気を大きく左右したAさんの機嫌によって評定すると、第1回は「普通」だった。つまり、この時はリストと現物を逐一照合した後、順調に許可証を手にする事ができた。第2回は「最高」だった。この日は何やらAさんが「ルンルン気分」なのがその表情からも察することができた。私は段ボール16箱を持ち込んだのだが、Aさんはたった3箱の検査で済ませてくれたうえ、梱包作業まで手伝ってくれたのだ。あいにく郵便局が閉まる時間だったので「明日まで段ボールを置かせてもらってもいいですか」ときくと、Aさんは「検査は済んだからいつ運んでもいいですよ」というや否や、半袖シャツから露出していた私の左上腕部をつかんで「モミモミ」した。この時覚えた戦慄は筆舌に尽くし難いが、私は日本人からすれば尋常ならぬこの行為も、その日のAさんの「ルンルン気分」の具体的表現であったと理解している。

「最悪」だったのが第3回だ。Aさん、Bさんが不在だったので、私は時間を節約すべくCさんを口説いて一緒に照合作業を進めていた。しかし、室長たるAさんを無視してこんなことをしてはならなかったのだ。Aさんは戻ると、不快感をあらわにし、開口一番「速いこと！」と皮肉を言った。おかげで20箱分全てを念入りに検査される羽目となった。この時私は二つの理由で故意に「危険」な文献を混入しておいた。一つには彼らのプロ意識をみるためであり、もう一つはもし検査されなければしめたものだと思ったからである。ところが、その危険文献を見事にはじき出したのがBさんだった。そういえば書類にサインするのはいつもBさんだけだ。とするとBさん、文化省に勤務しているものの、実は内務・公安関係の人間なのかもしれない。Bさんが「内務省の意見をきくから本を置いていけ」と言うので、私は「そんなに問題のある本だとは知りませんでした。すぐ本屋に返してきます！」と言って持ち帰った。大切な文献を没収されでもしたらたまったものではない。

本来ならばこれに第4回が続くはずだった。しかし、その機会は永久に失われてしまった。帰国の日が迫っているのに、手続きが間に合わなくなり途方にくれていると、国際郵便局の税関係官が郵送する文献を直接もって来いというのでその指示に従った。そして、現在はようやくこの方式でよくなってしまったらしい。友人に「文化省の人たちは失業してしまうのではないか」ときくと、「まだ他に仕事はあるから」とのことだった。